
重装騎士ベルセルク

人外の蛹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

重装騎士ベルセルク

【Nコード】

N9971H

【作者名】

人外の蛹

【あらすじ】

現代よりさらに科学技術が発展した近未来、人々はベルセルクという新たな兵器を手に入れ、殺戮を繰り返していた。

序章（前書き）

まだ序章です。前は情報不足で挫折しましたが、神話などの新しい知識を手に入れたので、今回は本気で名誉挽回できたらと。

序章

《序章》

西暦2010年、ドイツの技術者によって軍事兵器「ベルセルク」が開発された。

ベルセルクは初め、マシンガンで武装し、全身を装甲で覆った巨人の姿をしていたが、やがてその数は増え、武器の種類も増えていった。

ベルセルクの製造技術は初めヨーロッパに伝わり、中東やアフリカ、東南アジアでの対テロ戦争に駆り出された。その後技術はアジアに伝わり、主に中国の軍事を強化させた。

しかし、それもテロとの戦いを名目とした侵略戦争に過ぎず、マフィアなどを通じて漏れ出した技術は、南半球の過激派に殺戮の力を与えた。結果、紛争は激化し、世界は政府側とゲリラ側の分裂、民主主義の崩壊を迎えていた。

序章（後書き）

次は戦闘シーンです。出来るだけ立体的な描写をしようと思っています。

第一話 紅蓮のヴァルキューリ（前書き）

冒頭の戦闘シーンです。時話からは人間ドラマも絡んできます。

第一話 紅蓮のヴァルキューリ

空は青かったが、よく見ればその天井には淡い雲の膜が張っており、さらによく見れば、その膜の上では、巨大な複数の人影の戦闘が起こっていた。

「現在地、アイルランド上空、作戦、実行中」

途切れ途切れに、しかししっかりと、見えない相手に無線を通して重要事項を話す、紅蓮のヴァルキューリのパイロット、カナ・アUNDERSON（17）。周囲を敵、アイルランド軍のベルセルクに取り囲まれている。

彼女の機体の特徴は、紅い装甲、オレンジの目が二つ、背中に緑の粒子で出来た四枚の羽根があり、右腕に大型マシンガン、左手に白光を帯びた軍刀、全体はスマートである。

中のパイロットは長い黒髪と白い肌が自慢の日系ハーフの少女だが、今は酸素ボンベ付きのヘルメットで顔は見えない。軍服は黒地に黄色の線が入っている。階級は兵長である。

まあ彼女の紹介はそこまでとして、敵側はパトリックと呼ばれる量産型ベルセルクが五機居り、マシンガンで武装した茶色の機体、羽根は白いものが二枚で、腰の左にレーザー刀の鞘が一本。体格はずんぐりしている。

それが彼女のヴァルキューリに、隙を視て突貫しようとしているのである。

そして、とうとう痺れを切らした背後の敵の一機が、引き抜いたレーザー刀を振りかざし、ヴァルキューリに飛び掛かる。ヴァルキューリは刀で受け、そのまま力任せに押し戻そうとするが、無理だと分かると、敵の腹部にマシンガンを廻し込み、近距離射撃した。敵は吹き飛び、撃ち抜かれた機関部が爆発し、墜落した。

其れを機に、残りの四機は四方に散らばって集中射撃を開始した。

ヴァルキューリはシールドを張っていないが、間接部まで頑丈な次世代型装甲で覆われた機体は全く傷つかない。それが解ると、二機がヴァルキューリを挟み撃ちにしようと、前方と背後から突貫してくる。

ヴァルキューリは今度はそれを受けず、軍刀を周囲に振り払う。二機のパイロットは最初、何が起ったのかわからなかったが、数秒後、自分の身体がコクピットごと途中で切断されている事に気付く。そして、死んだ。

残された二機は、レーザー刀で左右から斬り掛かる。だがその刀も、機体ごと真つ二つに折られて、機体ごと遙か下の地に落ちた。

「紅蓮のヴァルキューリ、作戦終了。今からロンドンに帰還します」
ヴァルキューリのパイロット、カンナ・アンダーソンは無線に向けて言った。

第二話　大空のイザナギ& a m p・大海のイザナミ

アイルランド軍鎮圧を終えたカンナ・アンダーソン兵長は、ロンドン基地に帰還した。ドックに入ったヴァルキューリから、翼と眼光が消える。

ヘルメットを外し、英国人と日本人のハーフの顔があらわになる。背中のハッチを開き、コクピットから飛び降りる。

ドックの奥の部屋から、基地の廊下の一つに出る。基地内での戦闘に備えややこしい造りになっているが、幾つかの手順を踏んで、指令室にたどり着く。鋼鉄の自動ドアが不快音を立てて開き、目の前の椅子、部屋の中心の一際大きな上官専用のデスクとセットになった肘掛け椅子に座る、茶髪で楕円形の顔、茶色の髭を顔中に程よく生やした、推定三十代後半の上官、ロイ・ギルフォード。上級貴族の出身で、実家は本国で銘柄・玩具・最先端研究・軍事兵器等、広域に渡る経済力を持つ大資産家である。

「今回の作戦、ご苦労だった。予想以上に上手く行ったぞ。アイルランド政府は我が国との国交断絶に踏み切った。約束通り、報酬は君の両親に送っておこう」今回の作戦は、本国イギリスのベルセルク（まあヴァルキューリのことなのだが）をアイルランド領内に侵入させ、警備の機体数機を破壊することで戦争を誘発することだった。ベルセルクの導入で軍事力を強化させたヨーロッパ諸国は、それぞれの旧植民地諸国を再び吸収しようと侵略戦争を始めた。まずアフリカ諸国が制圧され、今はインド、香港自治政府との抗争が続いている。そして、今度はアイルランドである。もう、この国に平和などという言葉は要らないのかも知れないと、カンナは思った。

その頃、日本海上空では、自衛隊と進入してきた中国軍が衝突していた。中国軍が率いてきたのは、直径5000メートルを超える円

盤状のホバーシップ、神舟である。その中には二千機程の量産型ベルセルク、《黄兵》が格納され、表面付近には五万基を超えるレーザー砲が収納されている。

対して日本側の戦力は平凡な海上戦艦が二千隻と、まだ実験段階の量産型ベルセルク、《飛鳥》だけで、有利なのはどうか考えても中国側だった。実際、既に数百隻の軍艦が撃沈している。これは日本が中国の植民地にされるか否かの戦争なのだから、当の日本人にとっては大事である。

そんな戦局を舞鶴の軍港で見詰める二人の人物が居た。

「あんな古い軍艦でエンバンと戦うなんて、ばっかみたい。ねえ、早く行きましよ、美味しい餌が無くなっちゃう」

「そういう不気味な言い方を止める、ナオミ」

ナオミと呼ばれたのは、如月ナオミ（15）という赤髪の少女。おそらく髪は染めているのだろうが、その小柄な体格に反して、顔は20代後半と言われても疑えない程だ。彼女は単独型ベルセルク《大海のイザナミ》のパイロットである。

そして彼女をナオミと読んだのは彼女の兄、如月沙良（15）である。彼は単独型ベルセルク、《大空のイザナギ》^{タイクウ}のパイロットで、背はナオミより高いが、大人びた顔は変わらない。「ねえ兄さん、早く行きましよ、あのハゲ頭のおじさん達死んじゃうよ?」

「よしわかった。まだ本部からの命令が来てないけど、今行っただけ怒られないだろ」

そうして、緑の軍服姿の二人は部屋を出た。

第三話 大空のイザナギ & a m p ・大海のイザナミ2（前書き）

敵キャラ初登場です。本格的に闘うのは次回ですけど。

第三話 大空のイザナギ& a m p・大海のイザナミ2

豪雨が降り注ぎ、海が荒れる日本海上空を、二機の単独型ベルセルクが、神舟に向けて飛んで行く。大空のイザナギ、大海のイザナミ。双子の少尉が乗った機体は、二機だけで脆すぎる日本の防衛軍を援護しに行くのである。両機は共に装甲が白く、目も共に紫色をしており、体格は細いが筋肉質である。イザナミは赤光を帯びた二本の大剣で、イザナギは全身にレーザー砲やマシンガン、ミサイルを装備して武装している。

二機が天空城塞（神舟）に突貫し、その距離が千メートルに差し掛かった頃に、神舟は表面からついさつき突き出したレーザー砲の内一つで、彼らに砲撃してきた。

二機はそれを易易と交わし、そのまま500メートルまで間合いを詰める。直後、砲台とは別の穴が大量に開き、巣を破壊された蜜蜂のように大量のベルセルク、黄兵が飛び出す。それらはグンタイアリのように二機にたかって来るが、イザナギは調度殺虫スプレーを撒き散らすようにマシンガンを乱射、イザナミは大剣で襲いかかる敵を次々に討ち倒しながら、また城塞へと向かっていく。

そして、まずイザナギが砲台の一つを破壊し、イザナミがそうして出来た穴から船内に侵入した。

奥には護衛のベルセルクがマシンガンとレーザー刀を持って待っていたが、イザナギが銃撃して弱らせ、イザナミが斬り裂いて息の根を止める。そうして、圧倒的劣勢に立たされた自衛隊を救うために、神風は指令室へ急いだ。

天空城塞神舟の指令室では、遠征軍総司令のマオ将軍が選局の逆転に顔を歪めていた。

坊主頭で、胴に巻き付く形で黄金の龍の刺繍が施された深緑の軍服を来ており、制帽は着けていないが、右目に黒い眼帯を着けていた。

今は指令室中央の、総司令専用の肘掛け椅子に腰掛けている。

「將軍、指令室付近まで兵が…いかがなさいますか？」

彼の右横に立つ、マオよりは背が高いがひよろひよろした、イグアナの鰐のようなスポーツ狩りの上に制帽を被り、何の装飾もない緑の軍服を着た部下が言う。「関羽を出せ」

「はっ単独型ベルセルク、関羽に出陣命令！！」

「いよいよ俺の出番か」

城塞内に幾つかあるドックの一つで、赤い軍服を着た兵士が呟いた。李・ルイス（18、♂）。ベルセルク、《強襲の関羽》パイロット。目の前には漆黒のボディに赤いライン、赤い一つ目の機体。右手に矛、左手にレーザー銃。

これは、更に激しい日中戦争の幕開けを意味していた。

第四話 強襲の関羽

中国軍の主力艦、天空城塞神舟の機関部に侵入したイザナギとイザナミが見たのは、黒い闇の中に浸された、何か動物の心臓のような形で、ドクンドクンと波打つように運動する、城塞のエンジンだった。そのエンジンを破壊しようとイザナギが両方のビーム砲をエンジンに向ける。

その時、イザナギの右横から黒いビームが飛んできて、右肩のビーム砲を破壊した。イザナギは飛び退いて振り向く。其処には、紅いラインをまとった黒い機体、強襲の関羽の姿があった。目や粒子の羽根まで真っ赤である。関羽はイザナギとイザナミに向けて、背中の砲口から大量のホーミングミサイルを放ってきた。

イザナギとイザナミは其れをかわしながら接近し、まずイザナミが五十メートル前後まで間合いを詰めて、両腕の刀を振り上げて関羽に突貫、関羽の頭に刀を降り下ろそうとする。そして、イザナミは関羽の頭を縦真っ二つに割った。咎だった。関羽の姿はイザナミのパイロット、如月ナオミの視界から消えていた。

ナオミは、何が起こったのか理解できていない。

「ぐうあああああ！！！！！！」

後ろで聞こえた（厳密に言えば無線越しに）悲鳴にイザナミは振り向く。

イザナギが…関羽の右腕の大剣で頭を斬られていた。

おそやく、関羽のパイロットは何らかの方法でナオミの脳をハッキングし、時間感覚を麻痺させたのだろう。その間にイザナギの元へ移動したのだ。

勿論コクピットは胸部にあるから沙良は死んでいないが、これで沙良は戦場での視覚を失ったことになる。…いや、視覚はもう一つ残

つていた。アイカメラの破損と同時に起動するサーモグラフィイーである。

ミサイルが全身の装甲を破損させるのを無視し、イザナギは関羽に向けて突貫する。というのも、ミサイルで被弾した傷くらい、高性能ベルセルクは自然治癒するからだ。失った部位を、残された部位を溶かし、伸ばして補おうとする仕組みである。決して生物という訳ではないが、実際このシステムのモデルは人体の自然治癒能力である。

そして、イザナギは腰の左側に収納していたレーザー刀の鞘を、引き抜く。関羽は、パイロットが混乱しているうちに、イザナギの首を切り落とした右腕を切断されてしまう。

ここから、如月兄妹の大逆襲が始まった。

パイロットが動揺したのを視て、イザナミは関羽に突貫する。関羽はもう片方の腕をイザナミの大剣で切り落とされ、左の太股をイザナギのマシンガンで撃ち抜かれた。

最後の手段として関羽が放った大量のホーミングミサイルは、イザナギに迎撃された。

戦闘の手段を失い、関羽は撤退した。

□□□

その頃指令室では、マオ將軍とさつきと同じ華奢な軍人が話をしていた。

「將軍、関羽が戦闘不能に…」

「逃走経路にステルスを用意しろ、撤退だ」

「しかし自衛隊はほぼ壊滅状態です」

「壊滅したなら当分いつでも滅ぼせる。しかし今殺されては、私は国家首席の座を手に出れない」

「はっ…」

結果、戦局は好機に関わらず、中国軍は神舟を捨てて逃げ出し、中に居たイザナギとイザナミも、河のように流動する黄兵に紛れて脱出した。神舟は時限爆弾で爆発し、破片はその直下の海面に降り注いだ。既に全滅していた自衛隊の戦艦に、ある意味で被害はなかった。

□□□

その数時間後、ロンドンで。

「日本の自衛隊が、中国軍を撃退した」「そんな、あんな大勢の軍隊をですか!？」

「ああ。海上保安隊は全滅したが、たった二機のベルセルクが天空城塞に浸入し、内部から破壊したそうだ。機関部にまでその二機が侵入し、最後の盾だった関羽も戦闘不能になったので、城塞に爆弾を仕掛けて脱出したそうだよ」

ロイ・ギルフォードとカンナ・アンダーソンが話している。ロイは机に肘をつき、顔の前で指を絡めて、極めて冷静な表情だが、カンナは衝撃のニュースに啞然としていた。

「ここで日本に味方すれば、中国との全面戦争になるだろう。だが、中国に味方すればアメリカが敵になる。だから、次の指令はこうだ。ヨーロッパ全土及びアメリカと連合軍を組み、中国に報復せよ」

「は……」

どんどん拡大する戦争に、カンナは不安を覚えていた。

第五話 黄金のラムセス（前書き）

最近世界史の知識が豊富に入ったので、その影響が強いと思います。

第五話 黄金のラムセス

香港自治政府を、インドを占領したイギリスは、かつての世界帝国の地位を取り戻しつつあった。

同様にドイツやフランスなどの西欧諸国も、次々に貧弱な旧植民地諸国の軍隊を打ち負かし、その領土を凌辱していった…。

また東側でもその動きは見られ、中国はモンゴルや中東に遠征軍を差し向け、ついさつき失敗したが、日本にも攻め込んで来た。

西欧諸国は植民地に制限された自由を与えたが、反対側の中国は、属州となった地域に言語と宗教を強制し、従わない者に過酷な弾圧を加えていた。

一方、ベルセルクの導入が遅れたロシアとアメリカは、軍事力の弱体化を招き、その活動は国防に留まり、存在感は空気以下になっていた。

□□□

アフリカにも、未だに抗争を続けている国家があった。

「こちらカンナ・アンダーソン兵長、現在カルタゴ上空、作戦開始します」

紅い装甲、黄色い二つの目、四枚の緑の羽根、白光を帯びた刀。紅蓮のヴァルキューリは西欧諸国と連合して、最後の砦、イスラム諸国連合の制圧に乗り出していた。現在地はチュニジア共和国の都市カルタゴの上空。西欧諸国の連合軍は九千機のベルセルクで形成され、最前線のカンナの前方にも、遠方から襲ってくる、西欧諸国の約五倍のベルセルクの群れが見えていた。

黒い粒子の二枚の翼、黄色い装甲に緑の一つだけの目。量産型ベルセルク、《黄土のバステト》。諸国連合空軍の九割を、このベルセ

ルクが占めている。

そして、その最前線には、全身に金の塗装が施され、赤色の二つの目を持ち、紅い四枚の翼、右手の槍と左手のマシンガンで武装した《黄金のラムセス》。筋肉質な体格で、長身である。そのパイロットは、エジプト軍事大学を首席で卒業した、アルフォンス・バーサーク少佐（27歳）である。

ゲルマン系の彼はイスラム圏においてよく差別の対象になっていたが、彼はその才能によって、偏見の鎖を絶ち斬ったのだ。

両軍が高速で接近し、数分後、混じり合うベルセルクの群れの中で、二機の機体は交わった。

黄金のラムセスは右手の槍をヴァルキューリの胸に突き立てる。ヴァルキューリは、胸の前に緑粒子のシールドを張って、其れを食い止めた。

「お前は……誰だあ……!!」

アルフォンスと思われる掠れた息だけのような声が、ヴァルキューリのコクピットに届く。

「私はイギリス空軍のカナ・アンダーソン兵長だ!!」

ヴァルキューリのコクピットで、カナは無線に応じる。

ラムセスの槍先はジリジリとヴァルキューリのシールドを侵食し、今にも貫通しようとしている。

瞬間、シールドが消えた。同時にヴァルキューリはラムセスの後ろに廻り込む。体勢を崩したラムセスを、ヴァルキューリは後ろから銃撃し、四枚の羽根のうち、ヴァルキューリから見て右の二枚を消失させた。砂漠に堕ちていくラムセス。地面に衝突する直前に、ラムセスは羽根を再生し、体勢を立て直したが、ヴァルキューリが奇襲を掛けるのに、もう距離は十分だった……!!

突貫するヴァルキューリ。だが、槍を構えるラムセスの機体を、ヴァルキューリの刀が斬り裂こうとしたその時、カナの脳髓に激しい頭痛が走った。

「こんにちは、ミュータント君」

声はカンナの後ろからだった。彼女には見えなかったが、そこには、もう一機の機体、蒼の装甲にほっそりした長身、赤い目、尖った頭、巨大な斧で武装し、緑の四枚の羽根を持った、《蒼穹のダレイオス》の姿があった。

第五話 黄金のラムセス（後書き）

次回辺り、人間ドラマも入ってきます

第六話 L o k e（前書き）

またまた新キャラ登場です。カンナ過去の過去が明らかに…。

第六話 L o k e

「昔々、と言つても二十年も経つていない程最近の事です、ヨーロッパのある王国に、ある研究所が在りました。その研究所で行われていたのは、調度その頃平行して開発が行われていた、新兵器ベルセルクのパイロットを遺伝子操作で大量生産する研究でした。王国の政府はベルセルクとシンクロするパイロットがとつても少ないので、其れを科学技術で補おうとしていたのです。ですが其の研究はなかなか上手くいかず、沢山の失敗作の赤ちゃんが産まれてはガスで処分されました。ですが、一人だけ殺されず、助けられた赤ちゃんが居ました。その赤ちゃんは女の子で、その時研究所で働いていた科学者の夫婦に引き取られました。彼らは結婚して十年も経っているのに子供が出来ず、寂しい思いをしていたのです。勿論、研究所から失敗作の赤ちゃんを持ち出した事がバレれば、その夫婦も当局に消されてしまうので、他の研究員の目を盗み、隔離室の管理コンピュータをハッキングし、慎重に連れ出しました。その後十年程、彼女は平凡な少女として育ちましたが、十歳の春、自分の運動神経が異常に良い事に気付きました。そして、彼女は両親にその理由を尋ね、衝撃の

真実を知つてしまいました。悩める十代に差し掛かった少女の胸に鋭く冷たい鉄の杭が突き刺さります。その後、自分の命を救つてくれた両親に恩返しをしようと、中学校を卒業して直ぐに軍の全寮制学校に入りました。彼女がベルセルクのパイロットになるのには、二年と少ししか掛かりませんでした。最初は何処にでも居る二等兵だった彼女は、その後数ヵ月しか掛けずに独立型ベルセルク、紅蓮のヴァルキューリのパイロットに成りました。彼女は両親にも孝行し、自分がミュータントである現実も認めているつもりですが、本当は未だその苦しみから抜け出せずに居るのです。其れがお前だあつ！！！！カンナ・アンダーソンツ！！！！」

「止めろっ！！！！」

蒼穹のダレイオスのパイロット、リビアのセオドア・カダフィー大佐（27、♂）はカンナに語り続ける。カダフィーの容姿は、白人寄りの整った顔立ちで、赤褐色の肌、中途半端に伸ばした顎ヒゲがダンディだが、全体の印象はもつと嫌らしい。イスラム色の強い装飾の入った、青い制服を着ている。

対するカンナは男の言葉に指で耳を塞いで、何度もコクピットに額を打ち付け、目は震えて激しく動揺している。終いには髪の毛を掻きむしり始める。

バーサーク少佐の存在感は既に空気以下になっている。

面倒臭さを耐えてバーサーク少佐の容姿を説明すると、彼は祖のまま白人で、鼻は高く、目は蒼く、壕が深い。全体的に筋肉質ではあるが、細い。服装はカダフィー大佐に同じ。

ダレイオスは斧を振り上げ、弱ったヴァルキューリの頭を打ち砕こうとする。

同時に、バーサーク少佐のベルセルク、黄金のラムセスも槍でヴァルキューリの腹を下から突き刺して来る。

「いやああああああああああああああ！！！！！！」

その時、ヴァルキューリを挟み込む二機を第四者が銃撃した。ダレイオスとラムセスが振り向いた先に居たのは、《聖賢のロキ》。藍色の機体、緑の目。背中からは、二枚合わせれば体高の二倍はある、緑の羽根。その右手には体高程もある、先が三つに分かれた黒い鉾を持ち、左手には、これもまた体高程もあるビーム銃を装備している。そのパイロットは、ドイツの空軍提督、ベルセリウス・レオンハルト（35、♂）。茶髪碧眼、フサフサと顎ヒゲを茶色い蓄えた、壮年騎士であった。

第六話 L o k e (後書き)

聖賢の口キ。次回一体どんな活躍をしてくれるのでしょうか。あのビーム銃がメインになる気がします。

第七話 紫紺のオデュセイオン（前書き）

新キャラ、そして、第式幕序章です。

第七話 紫紺のオデュセイオン

ベルセリウス・レオンハルト提督のベルセルク、《聖賢のロキ》は右手の銚を大きく頭上に振り翳した。振り下ろされた銚の先が辿った軌道上に、透明な衝撃波が発生する。衝撃波は蒼穹のダレイオスの、斧を持った右手を切断する。

武器を握ったまま、空を舞う右手。

同時に左手のビーム銃のトリガーを引き、薄赤色のレーザーがラムセスの頭を吹き飛ばす。

「白人風情が偉そうに！！！！」

中に居るカダフィー大佐の罵声と共に、ダレイオスは残された左手で腰の右側から短剣を引き抜く。短剣は直後、赤い粒子光を帯びる。そして、ロキに突貫する。

ラムセスはその場に残り、ヴァルキューリを捕獲する為に、左手の短銃から緑粒子のネットを撃ち出す。

捕獲されたヴァルキューリはラムセスによってイスラム諸国連合のホバーシップに運び込まれようとしている。

一方、ロキはダレイオスの短剣を素手で受け止め、豆腐でも握りつぶすように、ダレイオスの短剣を握った左手を握り潰した。ダレイオスの左手は辛うじて本体に付いているが、ヘナヘナになって力なくぶら下がっている。ダレイオスは撤退する。戦闘手段を失ったためだ。

そしてロキは、ヴァルキューリを運び込んでいるラムセスの両腕を、さつきと同じ衝撃波で切断する。ネットに絡まったままのヴァルキューリは、住民の避難した砂漠の中の煉瓦製の家屋に墜落する。ラムセスも撤退し、ホバーシップに戻る。

ロキの操縦者はヴァルキューリに向けて無線を掛ける。

「やはりミュータント同士が出逢うと頭痛を起こすか。カダフィーもイスラム諸国連合軍のミュータント、何故頭痛が起きなかったの

か……。おい、起きろ日系人。もし今お前が闘っているなら、それは夢か妄想だ」

「ん…………んぐう…………」

カンナは起きた。口から泡を吹いている。

「作戦はバステトの奇襲によって失敗した。欧州連合軍も全て撤退したぞ、お前と私以外はな」

数分後、北の暗い空に、二つの機影が、粒子を軌道上に残して飛び去って行くのが見えた。

□
□
□

「へえ、あれが東京湾か……。とても発展途上国とは思えねえや……」

軍船の中、一室のソファーから窓の外を眺める金髪碧眼の少年。白いポロシャツにクロのズボン。日本の高校に来た留学生だろうか。

いや、彼は学生ではないし、長身のせいで解り辛いが、年齢も中学生のそれである。ギルバート・ヴァレリウス特殊兵（14歳）。

カンナと同じイギリス空軍の軍人だ。

「この向こうが中国だな、オデュセイオン……」

そう言つて、ギルバートは部屋の逆側の窓を見る。

其処には、広い筈のドックにぎっしり収まる機体。濃い紫の機体に緑色のライン、耳元まで割けた牙だらけの口、オレンジの目、全体的に生物っぽい。

《紫紺のオデュセイオン》。ギルバートの専用機。

彼は旅行でも留学でもなく、日本に対中国戦線を置くために派遣されたのである。

第七話 紫紺のオデュセイオン（後書き）

次回、ギルバートの性格に御期待ください。

第八話 紫紺のオデュセイオン2（前書き）

次回は大戦争です。今回は戦いは在りませんが、前触れです。

第八話 紫紺のオデュセイオン2

東京の軍港、戦艦ドックの中で、イギリスからの援軍を、軍隊の重鎮二人と300人の兵、如月ナオミと如月沙良が出迎えた。

来港した船舶から、500の兵士と、その後ろから二人の、白い軍服を着た兵士が降り立つ。

金髪碧眼の少年はギルバート・ヴァレリウス。長い金髪と碧眼の小柄な少女は、イルマ・ヴァレリウス（14[♀]）。ギルバートの妹（双子）である。小柄な体格は、ギルバートとは対照的だ。

「ギルバート・ヴァレリウス。オデュセイオンのパイロットだ。宜しくっ！！」
「妹のイルマ・ヴァレリウス特殊兵、《灼眼のフェンリル》^{シャクガン}のパイロットだ。宜しく」
人格も対照的だった。

「如月沙良特攻兵です。大空のイザナギのパイロットです。宜しくをお願いします」

「如月ナオミ特攻兵よ。イルマって言ったっけ、あんたみたいな感情無い兵士が大嫌いです。なので貴女には宜しくとは言いません」
そして、ドックを一瞬の凍てつくような寒さが襲う。

「私もお前のような凡人被れの軍人を視界に入れると吐き気に襲われる」

冷気はいつしかプラズマに、そしてレーザーに変わり、最後には二人それぞれの頭上で核爆発が起きた。

「まあまあ落ち着けて」

ギルバートが二人をなだめる。

「五月蠅^{うっせ}え！！！！！！」

逆効果だった。

「しばらく離れて居ましょう。ああなると三時間は止まらないんです」

沙良はギルバートを誘い、高温と放射能が蔓延するドックを脱出した。

□□□

本国に逃げ延びたマオ將軍は、北京紫禁城の地下に設けた作戦室で、部下と共に欧州連合との全面戦争に備えて会議を開いていた。

「天空城塞と量産型ベルセルク一万機を使った奇襲戦法、その全ては完璧で、日本側の軍事力を壊滅させた。なのに、在ろうことが我が軍はたった二機のベルセルクに敗れた。敵は既に我が本土への進攻を計画している。何としても全軍を指揮し、拡張した我が領土を死守しなければならない。我々漢民族は、アジア全土の他の民族を、少数民族として支配するのだ」

マオ將軍は円卓で演説する。横にはこの前の華奢な軍人。面倒臭さを抑えて紹介すると、敦仙山という名前である。

「將軍、お言葉ですが…」

「何だ、言ってみよ」

「欧州連合がイスラムと結びました」

「早う言わんか阿呆あほう！！！！」

□□□

カンナ・アンダーソン兵長は、部下と共にイスラム諸国連合の辺境軍事基地、サマルカンドに駐留していた。コンクリートの塀の後ろに、ベルセルクに乗ったまま、潜む。彼女らのベルセルク空軍は間もなく東進して中国領ウイグル自治区に侵入、現地の過激派と結び、更に東に兵を進め、日本側から進んできたギルバート・ヴァレリウス、イルマ・ヴァレリウスの部隊と北京で合流、同都市を総力爆撃する。

一つの政府を壊滅状態に追い込む、荒っぽい手段である。だが、其

れが両親の命を守る為なら、彼女は一国を滅ぼすことなど躊躇^{ためら}わない。両親への恩返しだけが、今彼女が軍人である目的なのだから…。
「ピコン」

水を落としたような音がして、ヴァルキューリのコクピットのモニターに、ロイ・ギルフォードの顔が映る。

「カンナ、出撃命令だ」

「はい」

そして、一つの《時代の終わり》が始まった。

□□□

ルイスは、専用機強襲の関羽の中で、人民解放軍の出撃命令を受けた。

イギリス空軍が属州キルギスタンに侵攻し、その報復である。モンゴロイドとは似ても似ても似付かない、金髪蒼眼の兵士、李・ルイス特攻兵はエンジンにキーを差し入れた。

□□□

「イギリスが動いた」

昼間とは暗いドックの中、イルマはノートパソコンの戦況モニターを見て言う。

「そうか、じゃあそろそろお前の愛車を出さないとな」

冷酷な、憎しみでも悲しみでも無い、ただ相手の何処までも奥深くを見詰めているような感情の死んだ眼をして、オデュセイオンの肩に座っていたギルバートは返事をした。

「そうする」

イルマはモニターを閉じ、眼前にある《愛車》を眺めた。

茶色い機体、赤い目、両腕には剣も銃も無く、ただ刃渡り五メートル

ルを超える、長い銀色の爪が生えている。両肩には、関羽のものより少し小型のミサイルポッド。《灼眼のフェンリル》。イルマ・ヴァレリウス専用機。

如月ナオミと如月沙良も、もう出撃準備に入っているだろう。目の前では自分達の側の兵がベルセルクのコクピットに入って待機している。黒い機体、緑色の赤い目、左腕にマシンガン、腰の右側にサイベルが一本。量産型ベルセルク、《漆黒のベオウルフ》。「じきに出撃命令が下るだろう。その時がカーニバルの始まりだ」

その時、古臭いサイレンの騒音が、基地内に鳴り響く。

「ほーらーね」

ギルバートは不気味に口元を吊り上げた。

第八話 紫紺のオデュセイオン2（後書き）

次回、北京攻略作戦。

第九話 北京攻防戦

中国領タクラマカン砂漠の地中には、中国で最も恐れられている過激派、《ウイグル・レジスタンス》の地下要塞が張り巡らされている。かつてはウイグル自治区の治安を脅かすマフィアなどを監視する自警団だったものが、ベルセルク導入政策後の中国政府の圧政によって、武装解放組織に転じたのである。

欧州連合とイスラム諸国連合の連合軍は、ウイグル・レジスタンスと同盟を結ぶ為に、この死の砂漠へと赴いたのである。

要塞の入り口は、黄土煉瓦造りの古代遺跡の内部をくり貫いて造られていた。

ベルセルクに乗ったまま、その巨大な口に兵士達が一人ずつ入り、数十分程で移動が終わる。

ヴァルキューリのカナナ、ダレイオスのカダフィー、ラムセスのバーサーク、ロキのレオンハルト。そして、二万機を超えるバステトの大軍勢。東から来て合流する予定のギルバートやイルマ、日本に駐屯するものとイギリス本土のものを合わせた五千機のベオウルフ、二千機のレジスタンスのベルセルク、コレを合わせてやっと中国側の半分だ。いや、もっと少ないかも知れない。

それらが地下ドックに収められ、連合軍とレジスタンスの面々が対峙した。連合軍の服装には、国によって違うものの統一性があり、兵士も若手の男性が多いが、レジスタンスの服装は統一性が無い質素な物で、兵士も女子供から老人までまとまりがない。共通点はターバンだけである。また当然、前者では白人、後者では肌の茶色いアーリヤ系人種がほとんどであった。

「数週間前に暗号で送ったとおり、私たちは欧州とイスラムの連合軍です。この度日本の自衛隊が中国軍の攻撃によって壊滅したので、この同盟はその報復をする為です。」

カンナはリーダー格の杖をつき、質素な玉座に座る老人に語りかける。老人の名はタジキンス・イスマイル。通称イスマイル師である。「まさかイギリスが我々に助けを求めて来ますとはのう、お嬢さん。まあ、我々が一つの国家を作れるなら安い買い物と思えば良いでしょう」

「しかし、その戦で負ければ我が民の命も…」

背が高く、目の壕が深く、細身の若い兵士の一人が言う。ケネス・ビンラディン大尉（16歳）。レジスタンスの一番有能な少年兵である。もしもつと性能の良いベルセルクが与えられれば、彼はイスマイル師の死後、革命の指導者に成るであろう。

「いいや、武装蜂起は行う。我々が死ぬ瞬間までウイグル人である為には、一層永遠に我々の名を歴史に残すために、闘って滅ぼう」ケネスは彼の考えを古典的だと軽視しているので、眉間に皺を寄せ、イスマイルから目を背けた。

「全ての権限はイスマイルにある。闘いを始めよう」

別の年老いた銀髪の兵士、サイク・ダルサラム（57歳）将軍が言った。

□□□

ギルバートとイルマ、ナオミと沙良を中心とする日本からの部隊は、直ぐに北京に到着し、爆撃を開始した。

無数のミサイルが家屋を吹き飛ばし、生じた業火が住民を焼き尽くす。

上空は、赤い羽根を持つ量産型ベルセルク《漆黒のベオウルフ》の大群が埋め尽くし、地上では地下から巣を壊されたシロアリのように這い出してきた、中国側の数万機の量産型ベルセルク。緑の装甲、間接部が黒く、紅い眼が顔面の中央に一つ。

《魏兵》。

飛行能力は無く、重機関銃で武装している。

しかし、いくら重装備をしていても、上から撃つのと下から撃つのでは、上からの攻撃の方が有利なのは変わらず、イギリス側の十倍も居た中国側の軍隊は、数十分のうちに半減した。

だが、こんなものが中国側の本領の筈が無かった……。

住民が逃げるか死ぬかしてほとんど居なくなった中心街の地面が急速に膨れ上がり、盛り上がった土壌が崩れて、中から直径2000メートルを超える地中城塞《帝舟》が姿を現した。

帝舟の表面から瞬時にハリネズミのような無数の砲台が飛び出す。

「図られたか……………!!!!」

唇を噛むギルバート。

「ねえ、兄さん……………」

「え？あ……………」

西の空に、無数のベルセルクが姿を現す。欧州連合とイスラム諸国連合、ウイグル・レジスタンスの連合軍だった。

第十話 北京攻防戦2

地中城塞帝舟の登場によって、連合軍は一気に窮地に叩き落とされた。

帝舟の装甲にびっしりと敷き詰められた大砲がレーザーを吐き出し、連合軍のベルセルクを撃ち落としていく。

撃ち落とされた連合軍のベルセルクは、地上で待ち構えていた中国側のベルセルク《魏兵》によって止めを刺される。

パイロットを蜂の巣にされたベルセルクは只の骸。あとは魏兵によって帝舟の内部まで引きずり込まれていく。構造を解析し、新たな量産型ベルセルク生産に応用するためだ。

「レオンハルト提督、俺に作戦があります」

イザナギの中の沙良が言う。

「作戦とは何だ」

ロキの中のレオンハルトが応じる。「帝舟の装甲に取り付いて、砲撃が当たらないようにします。すると、装甲の砲台とは別の部分が開いて、おそらく黄兵が飛び出して来るでしょう。そこが入り口です。入り口を破壊して内部に侵入し、城塞の機関部を破壊さえすれば、戦いは終わりです」

「前と同じだ」

ギルバートが呟いた。

「だな」

イルマが言った。

「今回はこちらの数も多い。犠牲は大きいでしょうが、それより増しな策は無いでしょう」

カンナが言った。

「我々ペルシア人種は殉教を何より名誉な死に方とする。俺が命と

引き換えに城塞の艦長を殺してやろう」

カダフィー大佐が意気込んで言った。

「殺されて死ぬか、殺したと同時に死ぬかでは、後者の方が増しと
考えます」

バーサーク少佐がやや知的に言った。そして決断が下される。

「全軍は城塞の装甲に取り付き、内部に侵入して指導者を殺害する
！！！！」レオンハルト提督は自軍の全残党に信号を送る。

数秒後、黄河の濁流のように数万機のベルセルクが帝舟に飛び掛かり、取り付こうとした。

そのとき…。

地中城塞帝舟の全身が橙色の光を帯び、下から炙られたクラゲのように膨張し、刹那——黄色の熱光が北京の街を包み、ベルセルクのパイロット達の意識は飛んだ——。

それからどれだけ経ったか解らない。

視界の果てまで続く灰の砂漠の中で、カンナ・アンダーソンは目を覚ました。まだ、ベルセルクに乗っているらしい。つまり生きているのは言うまでもない。ベルセルクは故障しているようだが、日常的なものを除けば、其れほど大きな怪我はしていないようだ。しかし、皆の行方が分からない……。

ここは何処だ。さつきまで北京に居た。焼き尽くされた北京に、自分が焼いた街の上に……。

「……………っ！！」

そして彼女は気付く。そうだ、ここは北京だ。焼き尽くされた北京、私が焼いた北京……………！！！！さっきの爆発で、ほとんどが白い灰（元は建物か屍か……）になっていた。

サンリ

サボテン

生きている者は見えない。蠍もスカラベも霸王樹もない、本当の死の砂漠……………。在るのは肉眼では果ての検討も付かない、雲一つ無い青空、こんな時に見ても嬉しくない。カリカリと地を焼く太陽、

そして、ベルセルク…………。

「よう、ゲームしようぜ…………っ!!」

太陽を背にして浮遊するのは、李・ルイスのベルセルク、《強襲の関羽》だった……………!!ただし、下半身が人型から八本足の蟹のように改造されており、其れだけでも前回と比べた印象は大きく違う。

関羽（厳密にはルイス）はそれだけ言うと、右手に構えた大型ビーム銃を突き出し、身動きの取れないヴァルキューリ（厳密にはカナ）に飛び掛かってくる。何て卑怯なと思うだろうか。いや、戦争に卑怯は無い。戦争は勝った者が正義、力のある、者だけが全てを決めるのである。

関羽はその蟹の体のような下半身でヴァルキューリの腹部を押さえ付け、調度コクピットがある胸の辺りにビーム銃を押し付ける。そして引き金が引かれ、エネルギーのチャージが始まる。

「機体ごと冥府に送ってやらあ……………!!!!」

今、毒薬のような桃色のレーザーが、カナナを蒸発させようとした。

《続ク》

第十一話 灰の大地で……（前書き）

新キャラ登場です。おそらく今回の黒幕になりそうなので、キャラの評価を宜しくお願いします。

第十一話 灰の大地で……

李・ルイスのベルセルク、強襲の関羽は、下半身を蟹のように改造し、カンナの乗っているヴァルキューリにのし掛かり、その右腕の下半分を占める高圧縮粒子銃（ビーム銃）を、ヴァルキューリのコクピットに押し付けた。

引き金が引かれ、数秒後には、銃口から飽和した粒子が漏れ出し始める。

カンナは悟った、己の死を、たった二人の人間の為に何百万もの命を消してきた、人殺しの最期を……。

カンナの視界は眼球を撃ち抜くような桃色の粒子光に包まれ、抵抗の無価値を知った彼女は目を閉じた。全身を衝撃が襲い、意識が消し飛ぶ……だが、次に彼女の視界に入ったのは、彼女の亡骸を死者の天秤に掛けるアヌウ・イスではなく、先程までと同じ蒼天だった。違うのは、関羽の上半身が吹き飛び、醜い蟹の残骸だけが残っていること、そして、彼女は眼前の真実を視た——右にはさつき発射したところなのであろう、ガバリと開けた耳まで割けたナイルワニのような口内に装填された粒子砲からモクモクと白煙を騰げている、トカゲの首を持つベルセルク、紫紺のオデュセイオン

……！！

「おゝい、大丈夫かあ！？」

オデュセイオンのパイロット、ギルバート・ヴァレリウスは陽気な口調で尋ねる。そんなパイロットと対照的に、オデュセイオンは無気味に中腰のまま咆哮している。

（ホントにロボットかよお、あれ生物なんじゃねえの？アイツ……）
カンナは思った。

「このお……白人がぁ……カッコ付けやがってえ……」

!!!!!!!!!!!!!!」

パイロットの咆哮と同時に、カンナの左側に吹き飛ばされていた、上半身だけの関羽がバーニアで浮上し、飛び掛かってくる。

ビーム銃をオデュセイオンに向けて乱射しながら、右手の粒子刀（レーザー刀とは別）を振りかざして……。ルイスは既に発狂していた。玉碎とばかりにオデュセイオンに突貫してくるベルセルク、関羽。オデュセイオンの鼻の（鼻が在るのだ……）先まで来ると、その頭上に粒子刀を振り上げた。真つ二つに断ち切られた……。それは、関羽の左腕だった。オデュセイオンは刀を持っていないが、代わりに両腕に長い爪が三本ずつあり、其れが蒼い光を帯びて、関羽の左腕を切り裂いたのだ。

立て続けに右腕を斬られ、ルイスは屈辱に悶絶する。

「次はパイロットごと真つ二つにしてやらあ、覚えてなっ！！！！！！」

関羽は撤退しようとする。だが、その命さえ、オデュセイオンの粒子砲は逃さはかった……。！！！！

天空に向かって放射された圧縮粒子の帯は、関羽のコクピットを貫き、そのまま業火に包む。十秒前後で、関羽は空気になった……。

「何故生きているの？」

無線でカンナはギルバートに聞く。

「一人を除けば皆生きてるよ、さあ、一緒に基地に戻って皆に会おう」

「《一人》って誰……」

「カダフィー大佐だ」

「カダ………フィ……」

カルタゴでカンナを奇襲した蒼穹のダレイオスのパイロット、セオドア・カダフィー。詳しく聞くと、爆発の前兆が見られたとき、バーサーク少佐の忠告を無視したのだという。

「殉教も無駄に終わればただの凄惨な死」……。カンナはギルフォ

ードの言葉を思い出した。

「意外ね、帝舟が自爆用の遠隔操作要塞だったなんて。ベルセルクも無人だったのかしら」

「いや、あの中には普通に兵士や将軍が居たよ」

「えっ……………！？」

「中国政府は今壊滅状態だ。北京は灰の砂漠と化し、逃げ遅れた北京市民は全員死亡。中国は事実上滅亡した。城塞は自爆なんかしてない。第三者の工作によって爆破されたんだよっ！！！」

「そんな……………っ！！」

カンナはひつと悲鳴に似た声を出した。

「城塞を爆破したのは、誰なの……………！？」

カンナは誰も知らない答えを、灰の大地にぶつけた。

□□□

欧州連合（EU）連合軍《ワルハラ騎士団》の本部、アテネ。軍会議での演説を終えたネルウ・ア・ウエルギリウス副元帥（23歳）は、本部地下の巨大コンピュータ《プロトレマイオス》に向かった。数千メートルも地下に降り、最下層でエレベーターは止まり、錆び付いた金属製の扉が左右に開いた。

ネルウ・アの視界に広がる、蒼いレーザーに染め上がった巨大な空間。壁に毛細血管のように配線が張り巡らされ、中心には円塔状の壁に囲まれた、回転可能な肘掛け椅子。其処まで彼は歩き、

「ネルヴァ・ヴェルギリウス。この地球の支配者^{ホシ}に選ばれし者だ」と言い、直後、部屋の扉が開いた。

彼は部屋に入り、中心の肘掛け椅子に腰掛けた。コンピュータが自動で個人認証し、画面が起動する。デスクトップには巨大なアウグストゥス像の写真。右下に新着メッセージの表示がある。ネルヴァがアイコンをクリックすると、音声 flowed。

《プログラム通り、中国人民政府を滅亡させました。》
濁った女性寄りの機械声が言う。

「第2段階成功。遂に世界が動き出す。ククク………」

ネルヴァがキーボードのエンターキーを叩くと、不吉なパイプオルガンの音色がプトレマイオスの内部に奏でられた。

第十二話 E N D O F T H E P E A C E (前書き)

ネルヴァが物語の軸となっていくます。奴の悪名にご期待。

第十二話

END OF THE PEACE

欧州連合の陰の指導者、ネルヴァ・ヴェルギリウス副元帥は、アテネの地下で巨大戦略コンピュータ、《ブトレマイオス》を使用し、計画を新たなステージへ進めようとしていた。

彼は北京に於ける地中城塞帝舟の爆破工作によって、中国人民政府を滅ぼした。

アジアの支配者の逝去に、世界は動揺している。

経済基盤が崩壊し、所有者の消えた土地には列強諸国の盲流が雪崩れ込む。

歪み、狂い、少しずつイビツなカタチになっていく世界……………。

彼は神に成っていく。

この世界の形を、手元の粘土のように、総て思い通り^{すべ}に変えて。

ワルハラ^の玉座に昇っていく。

彼はキーボードを叩く。

ネルヴァ・ヴェルギリウス。180センチを超える長身、あまりの細さにイギリス人から《スリム》のあだ名を付けられた身体、頭は小さく、短い金髪をオールバックにした《勘違い紳士》。

ブトレマイオスという巨大な部屋の中で、世界を地下から統べる者としての、反逆の序曲を奏でる…。

壁に埋め込まれたスピーカーから、パイプオルガンの音色が部屋に

充滿する。

醜く黒く、歪に歪んだ不気味な音色が……………

《北京の爆破工作の黒幕は未だ不明、政府を失った中国本土には四方の列強諸国が軍隊を派遣、勢力が衰退していたロシアも南下を開始し、既に満州を占領する勢いです》

戦闘終了後、崩壊した中国の中東領土の奪還に踏み切ったイスラム諸国連合の陣営、現ウイグル民主共和国（旧新疆ウイグル自治区）の首都ウルムチのレジスタンス（現ウイグル・イスラム党）のアジトで、戦死したカダフィー大佐を除き全員は、イスラム式の夕食（ラム肉とかナンとか羊のミルクとか）を摂りながら、液晶テレビのニュースを見ていた。政府が潰滅し、事実上解体した中華人民共和国の領内には、隙を見たロシア、独立を回復したASEAN、アメリカの援助を受けた日本などが進駐し、分割戦争が起こりつつある。

「数百年掛けてヨーロッパを統一したローマは、たった半世紀足らずの内紛によつて滅びた。同じように、今、百年の歳月を掛けて発展した中国もたった一日で滅びた。夏の夜の夢夢花火ってね」

「日本人らしい詩的表現だが……………鮎^{フナ}寿司よりも臭いっ！！！！

！！」

「ついってえっ！！！何で蹴るんだよ！？」

「何となく不愉快だったからだ」

今話している二人は、如月沙良とイルマ・ヴァレリウスだ。今もう片方を蹴ったのがイルマ、被害者が沙良である。

「ハハハッ、外見も背丈もそっくりなのに、俺とイルマの性格は正反対だ。俺が笑ってる時、こいつはいつも怒ってる。その逆もある」ギルバートが割り込む。

「兄さんの場合は泣く時もあるぞ」イルマが言った。

「お前だつて泣いたことあるじゃねえか!!」

「ばつバカな……兄さんの前で泣いた事なんて軍に入ってからはいのに……」

「週一回は枕が濡れてんだよっ!!」

「何故気付いたのっ!？」

「兄弟用二段ベッドで寝てる身だからな、そりや気付くさ」

「兄さんっ……酷いよう………こんなところでバラすなんてえ……」

……黙つてくれるって言つたのに………グスう………」

「あゝ泣かしたゝ」

ナオミが茶々を入れる。

「どうせ嘘泣きだろ!? 放つときや泣き止むさ……」

「びえゝゝゝん!!!!!!」

だがイルマの嘘泣きは激化していく。涙や鼻水までダラダラと流れる。誰がこれを嘘泣きだと思うだろうか。ギルバートが弱い美少女を虐めたA級戦犯に仕立て挙げられるのには、五秒の時間も掛からなかった。

「あのう……カダフィー大佐が死んでしまったので、話し相手がないから、そっちの会話に混じつてもい………」

「黙つてろっ!!!!!!!!!!!!!!」

カンナとギルバート以外の全員が言った。ちなみに、カンナは戦場での過労で基地に戻ってから水一滴飲まず眠り続けている。

その後、彼らはギルバートを散々に虐げ、暑苦しい陽光に覆われていた白銀の満月が姿を現す頃に眠った……。

□□□

《アテネ 連合軍議会会議場》

欧州連合連合軍元帥ウアレリア・アントン（53歳）は、揺り鉢状の巨大な会議場の中心の、窪んだ演説台に立っていた。額から脳

天まで禿げ上がった坊主同然の茶髪、170にも満たない小柄な身長、パスタの食べ過ぎか、腹は妊婦のような有り様である。

「我々はアジアの眠れる獅子（多分中国のこと）の死によってアジアに進出する力を獲得した。今ヨーロッパは百年前（ちなみに現在は204X年ということになっている）の分裂し互いに殺し合う醜い姿ではない。今のヨーロッパは欧州連合という巨大な連邦を形成し、その科学技術と団結によってアジアに植民地を拡げる……！！！！」

何万人もいる議員達から歓声が騰がる。彼らの熱と湿気が会議場を内側から蒸す。

だが、中央の重鎮の席が一つ空いている。そして演説が終わる頃、円形の会議場に四つ等間隔に置かれた出入口の一つから、ネルヴァ・ヴェルギリウスが現れた。ただし、彼はにやけている。とても真面目な会議をするつもりには見えない。

「おいネルヴァ、遅いじゃないか。僕は君を待っていた所為で昼食のパスタを食べ損ねてしまったぞっ！！！！夕食は必ずお前に倣^{おこ}つて貰うからなっ！！！！！！」

アントン元帥は人懐っこい笑顔でネルヴァに迫る。

「非常に言いにくいが、君は多分、もう二度とパスタを食べられないよ……」

そういうとネルヴァズボンの右のポケットに手を伸ばした。そして、一発の銃弾がアントンの脳髓を貫くまでに、時間は一秒と掛からなかった。

アントンは額の穴から鮮血を吹き上げ、何処の民族もしないような下手なダンスを踊って、机に倒れ込んで絶命した。そして、ネルヴァは演説台に上がる。

「やあ誇り高き同胞諸君、私の名は新元帥ネルヴァ・ヴェルギリウスっ！！！！たった今前元帥アントンを暗殺し、ヨーロッパ全軍部の主導権を掌握した。たった今から我がEUは世界を我が領土にす

べく軍事力を行使するっ！！！！！！」

その中継は世界中に流れ、カンナや仲間達もそれを聞いた。そして誰もが、《平和が終わったこと》を知った…。

第十二話 E N D O F T H E P E A C E (後書き)

次回、カンナ軍団とワルハラ騎士団が殺り合うでしょう。

第十三話 ワルハラ騎士団VSドルイド騎士団

ウアレリア・アントンの暗殺よって軍の前指揮権を掌握したネルヴァ・ヴェルギリウスは、まずイスラム諸国連合の強国、トルコ共和国に向けて、全長2000メートルを超えるテオドシウス級戦艦200隻、量産型ベルセルク五万機のテオドシウス艦隊を差し向けた。イスラム諸国連合は軍勢は多いが技術が弱く、またここを制圧すれば世界の半分を占領することになる、そう踏んだ作戦である。

テオドシウス艦隊の前陣から、諸国連合側の戦艦が、^{ハエ}蠅の群れのように、ベルセルクが蚊の群れのように接近してくるように見えた。数は多いが、彼らを倒すのは、それこそ殺虫剤を撒くように容易いことだ。

そう考えながら、ドイツ出身、赤髪茶眼と長身のウィルヘルム・シュヴァイツェル（54歳）艦長は、艦隊の中央のテオドシウス級の指令室のリーダーで、イスラム側の、全長1500メートルのクセルクス級三百隻、ベルセルク八万機のシャープール艦隊の軍勢を見ていた。

戦艦は雑魚と区別が付かないように、中央艦ではなく、周囲と変わらないものにした。

暫く様子を満足げに眺めると、やがてリーダーのウィンドウを閉じ、代わりに3つのウィンドウを起動する。そこには、まだ子供の風貌を残した三人の兵士の姿があった。

左には金髪蒼眼でまだ声変わりもしていない少年、マルクス・レオンシュタット（13歳）。右には赤髪赤眼の大柄で筋肉の発達した細身の少年、ハレルヤ・カルディロン（17歳）。

そして中央には、褐色の肌に褐色の髪、アーリアとアングロサクソンの血を引く少女、ウィリア・ヴェーダ（16歳[♀]）。

それぞれ、《天空のマルス》、《鮮血のヤヌス》、《聖炎のウアグニ》のパイロットである。

「時間だ……」

シュヴァイツェル艦長は彼らに向けて言った。

「解っています……」

三人は大体同じようなことを言った。

数分後、シャープール艦隊側に居たドウルイド騎士団（そろそろ組織に名前が必要かとカンナが提案）は、テオドシウス艦隊の戦闘の軍艦の側面から、三機の独立型ベルセルクが射出されるのを見た。

「来たな……」

「ああ……」

ヴァレリウス兄弟が言った。

「ここで負けるということは、世界の命運をネルヴァに委ねるということだ。分かっているな……」

ベルセリウス・レオンハルト（カルタゴ戦以来登場していなかったドイツの空軍提督）が聖賢のロキから支持を下すと、一団はテオドシウス艦隊の前陣に特攻した。

テオドシウス艦隊のベルセルクから銃声が鳴り響く。

マシンガンから発射された銃弾が描く無数の線を交わしながら、艦隊のベルセルクを、一機ずつ、接近して、武器を持った両腕や、肩のミサイルポッドを切断して戦闘不能にするか、コクピットを剣で串刺しにしてパイロットを殺すかして撃墜していく。一機のベルセルクで一度に六機以上のベルセルクに応戦するというのは、独立型

ベルセルクのパイロットだからこそ出来る技術だ。

間も無くテオドシウス艦隊のベルセルクの群れが左右に割けるように道を開いた。

三機の、おそらく機密で開発されていたのだろう、誰も見たことのない独立型ベルセルクが、こちらに向かってきていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9971h/>

重装騎士ベルセルク

2010年10月15日17時47分発行